

農薬の登録内容は頻りに変更されます。農薬は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/>)

営農総合センター 指導販売課 072 (444) 8001



# 野菜

## たまねぎ

**◆施肥**  
早生種は1月中旬下旬が2回目の追肥の時期である。いずみの化成(8・8・8)で50〜70kg/10aを施す。

**◆中耕除草**  
土を軟らかくし、肥大促進、品質向上を目的に、追肥時に中耕除草をする。その際、たまねぎの根はできるだけ切らないように軽く行なう。

中耕後に除草剤を使用する場合は表1の薬剤を使用する。土壌処理除草剤の散布は、土壌が乾燥していると効果が劣るので、適度に湿っている時に行なう。スズメノカタビラなどのイネ科雑草が多い場合には茎葉処理剤の効果が高い。

**◆病害虫防除**  
べと病・白色疫病は気候が温暖で雨が続きと発生しやすくなる。排水路を整え、過湿にならないように注意する。発生初期には表2の薬剤で防除を行なう。

表1 たまねぎに登録のある主な除草剤

薬剤名	RACコード	10a当たりの農薬使用量	10a当たりの散布液量	使用方法	使用時期	使用回数
トリアノサイド乳剤	H:3	200~300ml/10a	100ℓ/10a	全面土壌散布	定植後(ただし収穫75日前まで)	2回以内
クロロIPC(クロロIPC乳剤)	H:23	200~300ml/10a	70~100ℓ/10a	全面土壌散布	定植活着後または中耕後(ただし収穫30日前まで)	2回以内
ゴーサン乳剤30	H:3	300~500ml/10a	70~100ℓ/10a	全面土壌散布	定植後(雑草発生前)(ただし収穫60日前まで)	1回
ホーネスト乳剤	H:1	75~100ml/10a	100~150ℓ/10a	雑草茎葉散布	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(ただし収穫14日前まで)	2回
セレクト乳剤	H:1	50~75ml/10a	100ℓ/10a	雑草茎葉散布または全面散布	雑草生育期(イネ科雑草3~5葉期)(ただし収穫21日前まで)	3回以内

表2 たまねぎの病害に登録がある農薬

病害名	薬剤名	RACコード	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
べと病、白色疫病	リドミルゴールドMZ	F:4,F:M03	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	100~300ℓ/10a

表3 キャベツの菌核病に登録がある農薬

薬剤名	希釈倍数	RACコード	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
ベンレート水和剤	2000倍	F:1	収穫7日前まで	6回以内	100~300ℓ/10a
ロブラル水和剤	1000倍	F:2	収穫7日前まで	4回以内	100~300ℓ/10a

## キャベツ

**◆収穫**  
1〜2月は、松波を中心とした泉州キャベツの収穫最盛期を迎える。収穫が遅れると裂球するので、適期収穫に努める。

**◆病害虫防除**  
雨による過湿条件が続くと菌核病が発生しやすいので、うね間の排水に注意するとともに、発生を認めたら、発生を認めた

## 果樹

### 果樹全般

**◆樹勢の回復**  
近年、果樹全般に樹勢が低下

ら、発病株をほ場の外に持ち出して処分する。薬剤防除については表3を参照し、適期防除に努める。

**軟弱野菜の露地栽培**  
1月下旬〜2月上旬は年間で最も寒い時期となる。凍害等で品質が悪くなるのを防ぐため、必要に応じて、霜よけや保温資材(寒冷紗、不織布)を活用する(例①〜③)。

- ① 1mm目の寒冷紗やパステライトなどの不織布のべたがけ
- ② 透明ポリ、塩化ビニールのトンネルがけ
- ③ 透明ポリ、塩化ビニールのトンネルがけ+不織布のべたがけ

ただし、被覆すると中の様子が見えにくくなり、病害虫の発生等に気付くのが遅れることも多いため、注意する。



## 風邪のときは おかゆがおすすすめ

風邪の症状は人それぞれですが、風邪のときにおすすすめなのが定番のおかゆです。おかゆにどんなパウワーがあるのを見てみましょう。

- ・消化吸収しやすい
- ・最大の長所は消化しやすくエネルギー源になること。回復に必要なエネルギーを胃腸の負担も少なく吸収できます。
- ・飲み込みやすく、水分が取れる

風邪症状が喉の痛みに現れた場合、食欲があっても飲み込むのがつらいことで食事が取れなくなってしまう。おかゆは程よい粘度があり軟らかいため、喉の通りが比較的スムーズで飲み込みやすい形状となっています。水を飲むのもつらいときでも、おかゆが食べられるのなら、水分摂取ができます。

お米で健康  
管理栄養士、フーズスタイリスト ●大槻万須美

している樹が増えている。樹勢の低下している園では、たこ壺施肥による下層土壌の改良や、客土・堆きゅう肥の施用により、樹勢の回復を計画的に行なうと良い。

**◆せん定時の切り口のゆ合促進**  
せん定整枝時や病枝切除直後にできた太めの切り口には、ゆ合促進のため速やかにトップジンMペーストを原液で塗布する。

**◆園内清掃**  
病害虫の発生を抑えるため、落ちた果実や枝葉は、園外で処分し、園の病原菌や害虫の卵、幼虫、蛹、成虫の密度を下げておく。

## みかん

### ◆越冬病害虫の防除

12月中旬〜1月上旬にハーベストオイル(60〜80倍/10a当たり200〜700ℓ)を散布する。この散布により、ミカンハダニやカイガラムシ類の発生を抑えることができる。

ただし、ハーベストオイルは、油膜でダニ類を窒息させるため、葉裏まで丁寧に散布する必要があり。また、ハーベストオイルは樹を油膜で覆い、樹の呼吸を抑えるため、樹勢が弱った樹には3月中旬に80倍で散布すると

良い。

\*ハーベストオイルは、かんきつで登録がある。

**◆中晩柑類の収穫と貯蔵**  
はつきく、ネーブル、清見、不知火(デコボン)等の中晩柑類の完熟期は2〜3月だが、袋かけ栽培をしないときは、凍害や寒風害による果皮障害の危険性がある。

そこで、被害を受ける前の1月上旬までに収穫貯蔵して追熟させる。収穫後は風乾して果実重を3〜4%程度減少させる予措作業を行なう。

なお、暖冬の時はみかんを含め腐敗果が多発しやすくなるので、貯蔵時には傷果がないか十分にチェックする。



## もも

密植園では、日当たりを改善する意味で間伐を計画的に行なう。また排水の悪い園では、溝切りや暗きよ排水等を行なう。

**◆土壌改良**  
もも園の土壌が中性近くからアルカリ性(PH6.5以上)

になると、マンガン欠乏症が発生しやすく、生育不良や小玉果の原因になる。初期の症状は5月中旬頃から新梢の先端の葉色が薄くなり、葉の葉脈間の緑色が抜けてしま模様になる。

ももの根は、2月になると伸び始めるため、根を切る中耕や排水対策は1月中に行なう。

**◆せん孔細菌病対策**  
この時期は菌密度を下げて今年への発生を抑えるために、せん孔細菌病に冒された枝(春先には表皮が紫黒色に変色する)を切除し、園外に持ち出し処分する。

また、生育期の風ずれによる傷口からの感染を防ぐため、防風ネットや防風垣を整備する。

## ◆せん定

せん定は2月下旬頃までに、前年の結果枝基部の芽が欠けていないことを確認し、1〜2芽残すようにせん定をする。残す芽のすぐ上で切ると切り口が乾燥して亀裂が出来やすく新梢の伸びが悪くなるので、残す芽の少し上で切る。

なお、若木で枝を長く残す場合は、登熟していない緑色の部分は切り落とすようにする。

\*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/散布液量)を表示しています。

